「囚われのマルガリータ」

佐藤剛史

〈登場人物〉

・店主
・女
・客
・酒屋

開店直後のバー。
店主が店内を整えている。
カウンターにグラスが残っている。
扉の開く音。

店主　いらっしゃい。

ゆっくりと女が入ってくる。

店主　お好きな席へどうぞ。

女は隅のテーブル席に座り、店内を見回す。

店主　お飲み物は？
女　はい・・・
店主　メニューはこちらです。

女は目の前にあるメニューに目を通す。
再び女は店内を見回す。

店主　お客さん？
女　はい。
店主　うちの店、初めてですよね。
女　はい。・・・マルガリータ。
店主　マルガリータですね。

店主はマルガリータを作り始める。
女は自分のカバンの中からゆっくりと銃を出す。
店主は女におしぼりを出す。
女は銃をカバンにしまう。
女と店主は目が合う。

店主　何か？
女　いいえ。
店主　曲、変えましょうか？　他にお客さんもいないことですし。
女　これでいいです。
店主　そうですか。今日はね、こんなに空いてますけど、平日ですし、まだ八時前ですから。十時くらいになると、お客さんたくさん来るんですよ、うちの店は。あ、でも、静かに飲みたかったら、このくらいの時間に来るのが正解ですね。

店主はお酒を作りながら話をしている。

女は店主の話に耳を傾けながら、再びカバンの中に手を入れる。
店主はお酒を持ってくる。
再び女は顔を上げる。
女と店主は目が合う。

店主　どうされました？
女　いいえ。
店主　マルガリータです。
女　はい。
店主　飲んで落ち着いてください。

女は勢いよくお酒を飲む。

女　私、おかしいですか？
店主　いえ、そんなことないですよ。ちょっとそわそわされているようだったので。
女　やっぱりそうですか。落ち着け、落ち着け。
店主　はい、深呼吸。

女と店主は深呼吸。

店主　落ち着きましたか？
女　ありがとうございます。
店主　何かあったんですか？
女　いえ、大したことじゃないんです。
店主　それならよかった。入ってきた時ちょっと様子が変だったから。
女　そうでしたか？
店主　ええ、まるで銀行強盗でもしてきたみたいに。
女　え？

驚く女。バッグが落ちる。女の手には銃。

店主　冗談ですよ。何か落ちました？
女　あ。
店主　いいですよ。私が拾いますから。

店主はバッグを拾おうとして、女の手に銃があることに気付く。

店主　あ。
女　すみません。手を上げてください。
店主　はい。

店主は手を上げる。

店主　何の真似でしょうか？
女　逃げないでください。
店主　逃げませんよ。
女　カウンターの中に戻ってください。

店主はカウンターの中に戻る。

女　すみません。変なお願いして。
店主　いえ、このくらいのことお安い御用でございます。
女　落ち着け、落ち着け。
店主　深呼吸。

二人で深呼吸。

店主　落ち着きました？
女　はい。ありがとうございます。
店主　あの、本当に銀行を・・・
女　銀行？
店主　まさか、そんなねえ。それらしいカバンもないし。
女　カバン？
店主　いえ、こちらのことで。
女　あの。
店主　何でしょう？
女　動く時はなるべくゆっくり動いてください。
店主　わかりました。そのように心がけます。
女　あまり速く動かれると、困るんです。慣れてないもので。
店主　でしょうね。
女　すみません。
店主　いいんですよ。初めは皆さんそうですから。

間。

店主　どうします？
女　え？
店主　これから。
女　ええ。
店主　お金、渡した方が良いですか？
女　お金を？
店主　この時間なんで、あんまりないですけど。もっと遅い時間に来ればたくさんあるんですけど。
女　お金なんて、そんな。
店主　タクシー呼びます？
女　なんで？
店主　逃走するのに必要かな、と思って。
女　逃走は、まだ。
店主　要求は？
女　待ってください。今、頭の中を整理してますから。
店主　わかりました。

間。
女は銃を構えたまま、考え事をしている。

店主　それって本物？
女　どれ？
店主　その銃。
女　本物です。

店主　本当はモデルガンでしょ。
女　え？

女は銃を見る。

店主　ほら、図星だ。おかしいと思ったんですよ。そう簡単に本物が、それもあなたのような普通の方が手に入れるなんて。ねえ。
女　私、普通じゃありませんから。
店主　まあ、モデルガンとはいえ、こんなもの振り回して強盗まがいの事しようだなんて普通じゃないですけどね。
女　そうです、普通じゃないんです。
店主　劇団の方？
女　劇団？
店主　お芝居の練習とか。
女　お芝居じゃありません。
店主　ですね、見ない顔ですし。
女　本気なんです。
店主　どんな理由なんですか？
女　理由？
店主　私もこういう仕事してますから、いろんな方の悩みを聞く機会は多いんですよ。

店主は手を下ろし、女に話しかける。

店主　仕事がうまくいかないとか、借金で困ってるとか。私もお金持ちじゃありませんから、お金貸すわけにはいかないんですけど、相談にのるくらいなら。
女　相談はいいんです。
店主　まあまあ、遠慮なさらずに。そうだ、いいものお作りしましょう。
女　勝手に話を進めないでください。
店主　前向きに考えましょう。
女　動き回らないでください。
店主　とりあえず、そんなものしまって。あなたも座ってください。

店主は女に近づこうとする。
女は引き金を引く。
銃声。

店主　ちょっと、それ、モデルガンじゃないじゃない。
女　改造してあるそうです。
店主　どういうこと？
女　だからさっきも言ったように
店主　要求は？
女　え？
店主　お金？
女　お金じゃありません。
店主　お金って事にしときましょう。ね。今用意しますから。

店主はレジを開け、お金を出そうとする。
トイレの水が流れる音がする。
扉の開く音がして、客がやってくる。

客　何？今、すごい音したでしょ。あ、いらっしゃいませ。なんか爆竹みたいな。あ〜、私の片付けちゃったの？
まだ飲むのに。

客は女の手にある銃を見つける。

客　あ・・・。手洗うの忘れた。
女　動かないで。

トイレに行こうとした客は止まる。

女　こっちに戻ってください。
客　でも、手を
女　私のおしぼり使ってください。

客は女のテーブルのおしぼりを使う。
客は店主を見て、同じように手を上げる。

女　ご協力ありがとうございます。
客　お礼を言われても・・・本物？
店主　改造してあるんだって。
客　弾は？
店主　出る。
客　撃たれたの？
店主　どっかの壁。
客　どっか？
女　他にもいます？
客　他？
女　トイレの中。
客　トイレは一人で入ります。
店主　あんたのとこの人かと思ったよ。
客　うちの劇団の？
店主　また勝手にうちの店で練習始まってるのかと思って。
客　弾は飛ばしませんよ。
店主　だよね。
女　おしゃべりが多いです。
店主・客　すみません。

間。

客　で、要求は？
女　要求ですか？
客　お金？
店主　じゃないみたい。
客　お酒？
店主　出しました。
客　じゃあ、
店主　衝動的な
女　電話を・・・

客　電話？
店主　そこにあるから。
女　電話をしてください。
客　どこに？
女　警察。
店主・客　警察？
客　捕まるよ。
女　仕方ありません。
客　仕方ありませんって。
店主　ここで止めておけばいいじゃない。
客　そうそう、それで一件落着。
女　駄目です。電話してください。
客　わ、こっち向けないで。
店主　何もなかったことにしとくから。
女　お願いです。
客　電話してあげたら？
店主　仕方ないですね。

店主は電話を手にする。

店主　ありのままを話せばいいんですね。
女　はい。

店主は電話をする。

店主　・・・もしもし、すみません。鷹匠の「Barがらんどう」ですが、今、強盗が入って困ってるんです。来てもらえませんか？・・・具体的な被害は・・・お金は取られてないです。いらないみたいで。・・・逃げてません、今ここにいます。
女　来て下さい。
店主　聞こえました？　今のが強盗で・・・ええ、女性です。あ、そう、忘れるところでした。彼女、拳銃を持ってるんです。・・・モデルガンじゃなくて、いや、モデルガンですけど。でも、弾は出るんです、改造してあるらしくて。・・・聞いてます？・・・芝居じゃないんですよ。私とお客を一人、人質にして
客　助けて～
店主　ええ、今のがお客さんです。ええ、人質の・・・だから、この間のは冗談でしたけど、今日のは本物みたいで・・・みたい？　あ、ごめんなさい、本物です。・・・ですからそれは謝ったじゃないですか。あなた警察でしょ、それでよく「市民の安全」を守れるもんですね。・・・喧嘩売ってるのはそっちだろ！　何偉そうに。こっちは税金払ってるんだよ。納税者に向かってその態度は何だ！・・・もういいよ、言い訳は！

店主は電話を切る。

女・客　あ。
店主　駄目だ、警察はあてにならない。
女・客　え？
客　そんな喧嘩腰じゃあ。
店主　だってこっちの言うことまともに聞かないんだよ。頭にくるだろ。
女　だからってそんな。
客　リアリティーがないんですよ。
女　リアリティーですか？
店主　リアリティーって言われたって。

客　電話の初めから落ち着きすぎてました。そう思いませんでした？
女　言われてみれば。
客　いいですか、犯人は拳銃持ってるんですよ。弾当たったら痛いんですよ。
店主　痛いですめばいいけど。
客　そうでしょ。大変なことなんですよ。
女　私が犯人ですか？
客　当たり前でしょ。もっと自覚持ってくださいよ。いいですか、この「死人が出るかもしれない」という緊迫した状況を電話の向こうのお巡りさんに伝えなきゃいけない。
店主　向こうは聞く気がないんだよ。
客　任せてください。私、役者ですから。
女　役者さんなんですか？
客　はい。
店主　佐藤の緑茶の CM に出てる。
女　茶太郎？
客　「ちゃっきりちゃっきり茶茶茶の茶太郎！」
女　では、お願いします。
客　大船に乗った気持ちでいてください。

客は電話のところへ行く。

客　私が合図したら撃って下さい。
女　え、怖いです。
客　犯人が怖がってどうするんですか。緊迫感を出すためには必要なんです。
女　わかりました。
店主　あ、こっち向けないで。
客　こっちも駄目。
女　でも。
店主　だって弾飛ぶんでしょ。
客　リアリティーを出すためです。
店主　仕方ない、その辺だったら許しましょう。

女は銃を構える。
客は電話をかける。

客　もしもし、警察ですか？　大変です、今、銃を持った女が店に入ってきて

客は合図をする。
女は発砲する。

客　キャーッ！　すぐ来て下さい。このままじゃ誰か撃たれちゃいます。場所ですか？　鷹匠の「Bar がらんどう」です。え？　私はたまたま居合わせた客で、え？そうですけど何故名前を・・・本山巡査ですか？　すみません、先日はご迷惑をおかけして。ええ、もう二度とあのようなことは致しません。・・・はい、確かに以前もそう言いました、よく覚えてらっしゃる。はい、もう三度と致しません。・・・あ、ちょっと待って下さい。切らないで本山さん。今日のは本物なんです。さっき銃の音聞いたでしょ？　いえ、まだ威嚇射撃の段階で、あ、待って。だから三度としないって言ってるでしょ、今日は本物、三度目の正直、なんてね。待って本山じゅんさ〜。

客は受話器を置く。

客　駄目でした。誰か撃たれたら、もう一度電話をくれって。
店主　それじゃあ手遅れだろう。
女　なんで？　なんで警察は信じてくれないの？
客　実は先月うちの劇団の打ち上げでここ使ったときに、ふざけて警察に電話した奴がいて。

店主は客を指差す。

客　すみません、私でした。
女　じゃあ警察は、またイタズラだと思ってるの？
客　かな。
店主　全く人騒がせな。
女　せっかく銃まで撃ったのに。
店主　かえってうそ臭さを演出してしまったかな。
女　私が電話します。
店主　余計おかしいよ。
女　だって。
客　大体、何て言うつもりなの？
女　だから、来て下さいって。
店主　それじゃ駄目なのわかったでしょ。
女　でも、本人が言ってるんですから。
店主　それがおかしいっていうの。
客　わかった、リハーサルしよう。
女　リハーサル？
客　私が警察やるから。
店主　本山巡査？
客　誰でもいいよ。はい。
女　はい。
客　「もしもし、警察ですが。」
女　「もしもし、警察ですか？」
客　「はい、警察ですよ。どうしました？」
女　「あの、私、今、拳銃を持ってお店に立てこもってるんですよ。」
客　「それは困りましたね。銃刀法違反ですよ。」
女　「そうなんです。そんなわけで来て下さい。」
客　「どんなわけだ。」
店主　駄目だ。全然信用できない。
女　そりゃあ私は役者さんじゃないですから。
店主　そういうことじゃないんだな。設定がおかしい、普通じゃない。
客　捕まりたいんなら、ここで立てこもってるより、直接警察に行った方が速いんじゃないの？
女　それじゃあ、駄目なんです。
店主　わかった。ここで立てこもってテレビとかが取材に来るのを狙ってるんだ。そうでしょ。
女　それは・・・
客　あ、それでテレビに向かって要求とかするんだよね。
店主　それが目的？
客　それならそうと言ってよ。髪、これでいいかな。
店主　だから、この状態じゃテレビも来ないの。

扉が開く音。
三人は出入り口のほうを見る。
酒屋が入ってくる。

酒屋　どうも、お世話になってます。リカー田中です。いや、今日も客足鈍そうだよ。早く景気よくなって欲しいよね。

酒屋は女が拳銃を持っているのに気付く。

酒屋　あ、それで。これで。ああ。

女は酒屋に銃を向ける。

酒屋　うわあ、撃たないで撃たないで。お酒持ってきただけなんだから。・・・じゃあ、奥へ持って行きますね。
女・店主・客　ああ。
酒屋　何？
女　動かないで。
酒屋　そんな固いこといわずに、これ置いてくるだけなんだから。
店主　田中さん、言うとおりにしてください。
酒屋　また、そんなこと言う。それじゃ商売にならないでしょ。
客　商売のことは後回しにして。
酒屋　フリーターに商売のこと言われたくないなあ。
客　今はそんなこと言ってる場合じゃないですよ。
酒屋　早くちゃんとした定職に就きなさい。
女　協力してください。
酒屋　しょうがないなあ、皆して。ちょっとだけですよ。

酒屋は手を上げる。

酒屋　で、犯人役があの子？
店主　それが、役じゃないんですよ。
酒屋　で、こっちが人質役。
客　だから役じゃないんです。
酒屋　私も人質役？
店主　役じゃない。
酒屋　そうだよね。じゃあ私は警官役ね。
店主・客・女　え？
酒屋　だって、このこう着状態じゃ、話が前に進まないでしょ。ここは警察が来て、一気に解決へ向けてクライマックス。
店主　無茶言わないでください。
酒屋　何をおっしゃいます。私は市民の安全を守る警察です。無茶は承知の上です。
客　もう既に役になってる。

酒屋は持ってきた荷物の中から素早くジョッキを取り出して構える。

客　何？
酒屋　あ、これ？サービスで持ってきたやつだから、使って。
店主　いつもありがたいんですが
酒屋　さあ、ピストルをこっちに渡しなさい。渡さないと、このトカチェフが火を吹くぜ！
客　トカチェフ？
店主　警官は持ってないでしょ。
酒屋　君もこんな事で人生を狂わせてはもったいないぞ。まだ若いんだ。幸いけが人も出ていない。今からなら

やり直せるぞ。
客　どうします？
店主　このまま説得してもらおう。
酒屋　こんなことしてるなんて知ったら、君のご両親も悲しむぞ。
女　両親は関係ないんです。
酒屋　何を言うんだ。いくら離れて暮らしているとはいえ、お父さんは片時もお前のことを忘れたことなどないんだぞ。
店主　二役やり始めた？
酒屋　さあ、お母さんも。
客　私？
酒屋　そうですよ、お母さん。
客　幸子、もう気が済んだでしょ。そんな危ないもの捨てて、早くこっちに戻っておいで。
酒屋　聞こえますか、幸子さん。お母さんの声が。
女　私は幸子じゃありません。
酒屋　じゃあ、なんていう名前なの？
女　言う必要はありません。
酒屋　名前は？
店主　私も知りませんよ。
客　何を言うの、幸子。あなたは私たちの娘の幸子よ。
酒屋　幸子さん、お母さんは泣いているぞ。
女　だから幸子じゃありません。

銃を構える女の手に力が入る。

店主・客　わあ！
酒屋　撃つのか？　撃つのか？　よーし、撃つなら私を撃ちなさい。
客　田中さん。
店主　挑発してどうするの。
酒屋　大丈夫です。市民を守るのが私たちの仕事ですから。
店主　危ない。
酒屋　バキューン！　うわぁ！

酒屋は自分の声とともに床に崩れる。
そして、立ち上がる。

酒屋　ふっ、こいつを入れといて命拾いしたぜ。

酒屋は胸ポケットから栓抜きを出す。

店主　駄目だ、田中さんを止められない。
客　でも、撃ち抜かれてますよ。

間。

酒屋　うーっ、こっちだ。

酒屋は胸ポケットから王冠を出す。
間。

酒屋　さてっと。

奥へ行こうとする酒屋。

店主　田中さん。
客　途中で止めないで。
酒屋　だって、なんか皆ノリが悪いんだもん。私だけ一人で盛り上がってるみたいでさ。
店主　まあまあ、ここはみんなで協力し合って、彼女の説得に当たりましょうよ。
酒屋　当たってたよ。
客　田中さん、盛り上がりすぎ。
酒屋　そうかなあ。
店主　もうちょっと押さえてもらって、ねえ。
客　そうそう、トカチェフなんか出さずに。
酒屋　わかりましたよ。じゃあ、どっから行く？お母さんとこから？
店主　あの、お母さんとか、警官とか、そういうのはこの際抜きにして、シンプルに。
酒屋　だってそれじゃあ、面白みがないじゃない。
客　今回、面白みは追及しないんです。
酒屋　そうなの？　リアリズムで行く？
客　それで行ってください。
酒屋　わかりましたよ。じゃあ、そういうリアリズムな設定でね。

酒屋は女を見る。

女　何ですか。
酒屋　いいですか、幸子さん。
女　だから、幸子じゃありません。
酒屋　強情な人だなあ。いいじゃない、幸子で。
女　ふざけないでください。
店主　危ない。
酒屋　あー、わかったわかった。じゃあ誰でもいいや。あなた、私にどうしてほしいの？
女　どうって・・・電話してください。
客　だから駄目だって。
酒屋　電話くらいいいよ。
店主　駄目なんですよ。
酒屋　で、どこに電話すればいいの？
女　警察に。
酒屋　警察に？　何て？
女　来て下さいって。
酒屋　え？
店主　もう、電話はあきらめましょうよ。
女　でも、この人は外の人だから信じるかもしれません。
客　見てわかるでしょ。この人が一番うそ臭いんだから。
酒屋　フリーター、言いすぎ。良いでしょう！　私が警察に電話して差し上げましょう。

酒屋は電話のところに行く。

酒屋　本当にいいんですね。どうなっても知りませんよ。
女　はい。

酒屋は電話する。

酒屋　もしもし、私、田中酒店のものですが、今鷹匠の「Barがらんどう」に配達に来たら拳銃を持った女が店主と客を人質に立てこもっているんです。来てもらえませんか？

客　それじゃあ無理だって。

酒屋　わかりました。よろしくお願いします。

店主　あれ？

電話を切る酒屋。

女　どうでした？

酒屋　すぐ来てくれるそうです。

店主・客　おお！

酒屋　で、この先の展開は？

店主・客　え？

三人は女を見る。

女　警察が来ても、申し訳ありませんが、皆さんにはしばらく人質になっていてもらいます。

客　え？　素直に捕まるんじゃないの？

店主　だったら自分から行くでしょう。

女　もうしばらく立てこもらせてください。

酒屋　しばらくったってねえ。私も配達の途中だし。

客　そうか、テレビだったよね。

酒屋　何？　その「テレビ」って。

客　テレビ局に来てもらって、実況中継とかして。

酒屋　ああ、あるある。それをここで？

店主　そうだね、警察が来ればそのうちテレビ局も来るね。

客　これで要求どおり？

女　そうですね。一応。

店主　事態が少しずつ良い方向に進みつつあるようですね。

酒屋　電話した甲斐がありました。

客　本山巡査、自転車で飛ばしてくるはずだから、すぐに来ると思うけど。

店主　本山巡査が来ても、我々は下手に動かない方がいいですよね。

酒屋　そうですね、犯人は拳銃を持ってますし、その本山巡査が来ても、この辺りにいておとなしく人質してましょう。

客　それでいいですか？

女　よろしくお願いします。

酒屋　あ、来たみたい。

女は拳銃を構える。店主と客は手を上げる。

酒屋は出入り口の方へ行く。

店主・客　田中さん！

酒屋は振り返る。と、手にはジョッキが。

店主　まさか。

酒屋　警察だ。おとなしく銃を渡しなさい。

客　そう来るか。
女　電話はうそだったの？
酒屋　うそではありません。先程配達途中の酒屋さんから通報があり、飛んできました私、本山巡査であります。
女　からかわないで。これ本当に弾が飛ぶんだから。
店主　あー、やめて。
酒屋　あなたが撃ったら私も撃たなければなりません。それでもいいんですか？
客　よくありません。ちょっとタイム。
女　タイム？
客　ちょっと、田中さん。
酒屋　今は本山巡査。
客　本当に警察に電話してないの？
酒屋　するわけないでしょ。
店主　さっきの電話は？
酒屋　１７７番。明日は晴れだって。
客　何の進展も無い。
酒屋　あ、まさか私を共犯にしようと思ってるんでしょ。そうはいきませんよ。先月の「イタズラ電話騒動」有名なんだから。そういうことだったら私、急いでるんで。

酒屋は荷物を持って奥へ。

店主　ちょっと、待って・・・
客　どうします？
店主　あちらさんは？
女　この銃を偽物だと思ってるんですね。
店主　思ってない、思ってない。
客　正確には弾の出るモデルガンって。
店主　だからもう撃たないで。
女　警察は来ないんですね。
客　この際だから、呼びに行こうか。
店主　私が行きましょう。
客　私が行く。
店主　あなたは本山さんに迷惑かけてるんだから、信用ないんだよ。
客　でも、この状況で店に責任者が不在っていうのも困るでしょ。
店主　困らない。すぐ戻ってくるから。
客　逃げようとしてますね。
店主　そんなことないよ。
客　二人で行きましょう。
店主　それじゃあ、人質がいなくなっちゃうでしょ。
客　奥に居ますから。

奥から酒屋が戻ってくる。

酒屋　何？　じゃあ、私はこの辺で。
客　ちょっと田中さん、留守番しててもらえます？
酒屋　何言ってるの、まだ行くとこあるのに。
店主　すぐ戻ってきますから。
酒屋　駄目駄目、もうお芝居の練習は終わり。
女　お芝居じゃありません。
酒屋　お、いいね。あなただけだよ、初めっから気合入れてやってたの。この二人はすぐに打ち合わせに入った

りするんだから。
女　警察を呼んでください。
酒屋　ほらほら。もう、フリーターも見習いなさい。
客　田中さん、実はね
酒屋　じゃあ、帰ります。
女　帰らないで。
酒屋　あ、何かいいねえ。女の子に「帰らないで」って。私生活で言われてみたいもんだね。じゃあ。
女　駄目。
酒屋　あ、いいね、「ダメ」って。でもそう言われると、かえって意地悪したくなっちゃうよ。

酒屋は出て行こうとする。

客　待って！
酒屋　あんたに言われても盛り上がんないなあ。
女　これ、本物なんです。
酒屋　本物？
店主　そうなんです。
酒屋　わかった。配達終わったら、また続きやりましょう。
客　本当なんです。
酒屋　本当に帰らないといけないんで。
女　ちゃんと話を聞いてください。
酒屋　それじゃ。

酒屋は出て行く。
女は引き金を引く。
銃声。
酒屋は胸を押さえる。

酒屋　うっ。何で私が・・・
店主　田中さん。
女　あー！
酒屋　・・・あ、後ろから撃たれたんだったね。(背中を押さえる)うっ、何で私がー。って、本当にもう時間ないんで、また後で。

酒屋は去る。
女は震えている。銃を放す。
客は銃を取り上げ、店主に渡す。
店主は銃をカウンターの中にしまう。
ふさぎこむ女。

店主　もう止めましょうよ、こんなこと。わかったでしょ、これがどんなに怖いものか。
客　怪我人が出なかっただけでもよかったですよ。
店主　そうです。
客　何でこんなことしたんです？

間。

店主　余程の事情があるんでしょう。
客　どうします？

店主　これ以上人が来ると、余計ややこしくなるから。
客　札、「準備中」にしとけばいいですよね。
店主　お願いできる。

客は一旦外へ出ていく。
店主は女に水を出す。
女は水を飲む。
客は戻ってくる。
店主はグラスを下げる。

客　お酒飲んでたの？
店主　「マルガリータ」。ロサンゼルスのバーテンダー、ジャン・デュレッサーが一九四九年のナショナル・カクテル・コンテストに出品し優勝したカクテルです。
客　またうんちく。
店主　マルガリータというのは彼の恋人の名前で、メキシコ生まれの彼女にちなんでメキシコの酒テキーラをベースに作られています。
客　その恋人、うらやましいね。
店主　しかし、彼がこのカクテルを生み出したとき、すでに彼女はこの世にはいなかった。その二十年ほど前、二人で狩りに出かけたとき、誰かの撃った流れ弾に当たって彼女は倒れ、彼の腕の中で息を引き取ったのだそうです。亡き恋人を愛し続けたバーテンダーは自分の傑作に彼女の名前をつけた。
客　危うく我々もカクテルになるところでしたね。
店主　悲しいかな、我々に弾が当たっても、カクテルを作ってくれる恋人はいない。
客　それは言わないで。

女、立ち上がる。
店主と客は女を見る。

女　あの
店主・客　何でしょう？
女　お手洗いを

店主と客はトイレを指差す。
女、トイレへ行く。
見送る店主と客。

客　大丈夫かな。
店主　とにかく危険物は取り上げましたから。
客　警察には？
店主　今のところ重大な事件にはなってませんし。
客　それに、我々じゃ呼んでも来てくれないか。
店主　それもそうですね。
客　・・・じゃ、どうするの？
店主　彼女の話を聞いてみないと。
客　お金目的じゃないんだよね。
店主　ええ。普通はそうなんですけど。
客　何か、恨みかってるとか？
店主　私が？
客　女泣かせるようなことをしてたりして。
店主　初めて会う子ですよ。

客　隠し子だったりして。
店主　娘は一人で十分です。
客　そっか、娘いたんだったよね。
店主　海外に。
客　男手一つで育てた娘を、どこの馬の骨ともわからぬ男に。
店主　私の話はいいから。
客　そうだね。じゃあ身に覚えは無い、と。
店主　ええ。
客　では彼女の動機は何なのか。
店主　やはりこのご時世、会社の首切りにあって、とか。
客　ああ、ありそう。で、生活が苦しくなって、お金が・・・ってお金が欲しいわけじゃないんだよね。
店主　お金じゃなくって、テレビを呼んで、今の世の中に訴えかけたい。
客　何を？
店主　百年に一度といわれるこの経済危機においてもなお自分本位な会社経営に終始する資本家に対して、あるいはセーフティーネットに無頓着な国の姿勢に対して、あるいは
客　他の可能性も考えよう。
店主　難しいからって話題変えたい？
客　失恋。
店主　まあ、そういうのもあるね。
客　男に振られ自暴自棄の果てに、こんな事件を。
店主　失恋で、ここまでやるのか。
客　枯れかかったオヤジにはわかんないのよ。あんなに私の事「好き」って言ってくれてたのに。一体何が彼の心を変えてしまったのか。
店主　あなたの話はいいから。
客　全国に訴えかけたいわけよ。
店主　テレビを使って？
客　そう。「何で！？二股ってどういうこと！？ばれたら別れるって、ちょっとそれで許されると思ってるわけ！？そんなの万が一私が許したとしても、世間の皆さんが許すわけないでしょ」
店主　だからあなたの話じゃなくって。
客　だってさあ。
店主　理由はどうあれ、彼女は今ひどく落ち込んでいるはずですから、このまま帰すわけには行きません。
客　そうですよね。どっかで思い余って・・・なんて気を起こさないとも限らない。
店主　そうです。

二人はトイレの方を見ている。

店主・客　まさか・・・

二人はトイレに近づきのぞこうとする。
水の流れる音。
二人は何事も無かったように元の位置へ戻る。
戸の開く音。
女がトイレから出てくる。

女　すみません。お騒がせしてしまって。
店主　いえ。幸い大事には至っておりませんし。
客　我々で力になれることがあったら言ってください。
女　いえ。これ以上迷惑は。
店主　さっき以上の迷惑なんて、もうありませんよね？

女　・・・はい。
店主　だったらうちは大丈夫。
客　準備中の札も出しておいたから、貸切ってことで。
店主　もう少しここで落ち着いていかれたらどうです？
女　・・・ありがとうございます。

女、座る。

店主　今、二人で話してたところなんですよ。お仕事のことで、何か困ったことでもあったんじゃないかってね。
客　仕事は何を？
女　・・・派遣社員を。
店主　ああ、派遣社員を。
客　でも仕事があるだけ良かったね。派遣切りって言われるくらい、世間では情け容赦なく切られてる中で。
女　切られました。
店主・客　え？
女　派遣先を切られて、今待機中です。
客　あ、そう・・・
店主　でも、待機中ならよかった。そのうちまた声がかかりますよ。
女　そう思ってもう三ヶ月待ってます。
店主　なるほど・・・
客　それじゃあヤケにもなるか。
店主　だからって強盗はいけませんよ。何の解決にもならない。
女　そうですよね。
客　これからどうするんですか？
女　どうって・・・
店主　両親はどちらに？
女　伊豆の方に・・・
店主　いっそのこと、実家に戻ってみたらどうです？
女　でも・・・
店主　大丈夫です。どんな理由で実家を出ているとしても、親っていうのはね、最後まで子供の味方でいたいって思うものなんですよ。
客　さすが、人の親は説得力がある。
女　実家には帰る気はありません。
店主　そんな事言わずに。私も一人娘が勝手に海外に出て行っちゃいました。そりゃあ、文句はいくらでも言いたいですよ。でもね、困った時にはいつだって
女　親とケンカしてるわけではありません。
店主　あ、そう。じゃあ
客　男？
女　・・・
客　こっちに男がいるんだね。それでここを離れられない。
店主　でも彼氏がいるんだったら、こんなことせずに、彼に力になってもらえば、
客　それが出来ない事情があるんですよ。
店主　あなたとは違うって。
客　いやいや、こういう時に彼氏が支えることが出来なかったからこういうことに
女　彼は関係ありません。
店主　いるんだ。
女　でも、もう別れたようなものですから。
客　やっぱり失恋したんだね。彼に捨てられて、仕事も無く、貯金も底をついたあなたは、生きていくために強盗を企てた。

店主　だったらここでなくても。
客　そうだよ、こんなチンケな店でなくって。
店主　チンケとは何。
客　失礼。もっと大金のありそうなお店に
店主　しかし、大金のありそうな店というのも、どこかわからないよね。
客　そう。だからとりあえず入りやすそうなお店に入ってみたら、やっぱり大金なさそうだったんで、身代金を取ろうと計画を変更。
店主　でもつかまったら元も子もない。
客　そこはうまいこと交渉してね。
店主　テレビに映っちゃったら、どこにも逃げ切れない。
客　だから海外へ高飛び。
店主　空港で捕まる。
客　「チャーター機を用意しろ！」
店主　そういう人に見える？

二人は女を見る。

客　やっぱり彼への恨みをテレビに向かって。「何で私を捨てたのよー」
女　そんなこと
客　今は落ち着いてるからそう思うけど、かっとなった時はね。あ、まさかあの銃は彼を撃つために手に入れたんじゃ。
女　彼を撃つなんて。
店主　そういえば、改造拳銃はどこから手に入れて？
女　・・・インターネットで・・・
店主　今、何でもネットで手に入るんだね。
客　彼はどんな人？
女　いい人です。
客　あなたのこと捨てたのに？
女　捨ててません。私が勝手に出てきただけで。
店主　何で出てきたの？
女　それは、彼に迷惑をかけたくなくて。
客　不倫だったんだね。
女　違います。私は独身です。
店主　彼は？
女　・彼もそうです。
客　いやいや、そういう奴に限って奥さんいたりするんだよ。会う時には指輪を外してたりしてね。何て姑息な手を使うんだ。でもそういうのにうっかり騙されちゃうんだよ。本当、我ながら困ったもんだよ。
女　アランはそんな人じゃありません。
店主　アランって？
客　彼の名前？
女　はい。
店主　外人？
女　日本人です。
客　ハーフなんですよ。
女　ハーフでもありません。
客　芸名？
女　私たちの間での呼び名で。
店主　ちなみにあなたの呼び名は？
女　私はマリー。

客　まだまともか。
店主　仕事は何やってる人？
女　運送会社をやってて。
客　彼の本名は？
女　本名は・・・
店主　無理に言わなくてもいいよ。聞いてもどうにも出来ないし。
客　何年くらい付き合ってるの？
女　半年・・・
客　半年だったら、まだ傷は浅いか。
女　でも、彼との出会いは運命的だったんです。
客　運命的・・・

店主は曲を流し始める。

女　あれは去年の十二月。職場の忘年会の日でした。その職場も派遣されて一ヶ月。人付き合いの苦手な私も自分を変えよう、何とか自分でも馴染もうと参加したつもりだったんです。でも、途中で何だかよくわからないような理由をつけて帰ってきてしまって。結局はその場を楽しめなくって、「私はここに居てもしょうがない」なんて思ったんです。また駄目だった・・・。当てもなく、ただ何となく駅の方向に歩いていた私は急に自分が情けなくなって、涙が溢れてきました。
店主　時は師走。街はクリスマス気分で、明るく賑やかなイルミネーション。それがまた、彼女の孤独をより一層際立たせてしまうのであった。
女　そうして、泣きながら歩いていた私に、彼が声をかけてきたんです。「ハンカチ落ちましたよ」って。
客　ドラマみたい。
女　ドラマみたいって思いました。彼の手にはさっきまで涙を拭いていた私のハンカチが。見ず知らずのこんな駄目な私に声をかけてくれる彼に運命を感じました。
客　ナンパだとは思わなかったの？
女　よくいるナンパの人とは全然違いました。ハンカチを渡して去っていこうとする彼に声をかけたのは私の方でした。「あの、お名前は？」
客　「アランです。」
女　変わった名前ね、私は・・・マリーです。
客　それで二人は恋に落ちた。
女　そうです。何に対しても生き甲斐を感じられない日常、自分がいなくても進んでいってしまう時計の針。彼に会わなければ私は生きる意味も見失って死んでいたかも知れません。だから彼のおかげで今の私があるんです。
店主　しかし、その幸せなはずの二人が何でまたこんなことに？
女　彼の仕事がうまくいかなくて。
客　それでお金が必要になった。
女　はい。私も貯金を崩して何とかしようと。
店主　しかし、それでも足りずに強盗を。
女　はい。
店主　えーっと。
客　でも彼とは、迷惑がかかるからって別れて、で、お金が必要なのに、お金のない店に入って、
店主　ちょっと待ってね。整理しよう。

店主はカウンターから紙を出してメモを始める。

店主　まずは強盗に至るまでの経緯として・・・
客　ちょっと！このメモ用紙、うちの公演のチラシじゃない。
店主　いいでしょ。もう終わった公演のなんだから。

客　しかも私の顔が切れてる。縁起悪い。
店主　この位の大きさが書きやすいんだから。
客　人の顔は避けてくれればいいのに。
店主　ちょうどいいところに印刷されてるんだもの。今度からずらして印刷してもらって。
客　だからってこれは、ちょっと。ねえ、そう思いません？

客は女にチラシを見せる。
チラシを見た女は客からチラシを奪い取る。

客　どうしたの？
女　アラン！
店主・客　え？！
店主　アランって？
女　この人。

女はチラシに載っている写真を示す。

店主　あんたの舞台に出てたの？
客　モッキーさん。
店主・女　モッキーさん？
女　アランじゃないの？
客　はい。
店主　アラン・モッキーとか言うんじゃ。
客　いいえ。本名は荒川元樹って・・・
店主　荒川元樹、アラン・モッキー。
店主・客　ビンゴ。
女　何でこんなところにアランが。
客　モッキーさんは、この公演までうちの劇団にいたんです。
女　私、そんなこと知りません。
客　辞めてからもう一年以上経ちますから。
店主　あなたが会ったときには、もう辞めてたわけだ。
客　不景気の影響で会社が大変だっていうのは聞いてたんです。だから劇団辞めるっていうのも仕方ないかなって。私生活でもいろいろあったらしくって、この公演の時も「奥さんが実家に帰っちゃって」なんて言ってましたから。
店主　奥さん？
女　アランは結婚してたの？
客　そうです。・あ、余計なこと言っちゃいました？

二人は女を見る。

女　・・・お水頂いていいですか？
店主　どうぞ。

女はカウンターの中に入って水を飲む。
そして、拳銃を手にする。

店主　ちょっと、早まらないで。
女　アランは私に嘘をついてたんですか？
客　いや、奥さんとはその後別れてしまったかも。

女　気休めは要りません。
客　気休めじゃなくって、可能性としてねえ。あの人本当に家のことほったらかしで、女癖も悪くって甲斐性もなかったし。
女　アランの悪口はやめてください。
客　いやあ、本当にいい人でした。
店主　でも嘘をついて。
客　モッキーさんはあなたと運命的な出会いをして恋に落ちてしまった。本当のことを言わなければいけない、と思いながらも止むに止まれず言い出せなかった。
女　そうなんでしょうか？
客　そういう人なんですよ。あなたに会って「今日こそは」と思いながらも、あなたの顔を見てしまうと本当のことが言えない。あなたを傷つけられないって。やさしいところあるんですよ。
店主　本当に優しかったら本当のこと言うんじゃないの？
客　そんなこと言わないで。だから、そう、いつか言わなければってちょうど今悩んでる最中なんですよ。
店主　そういう男は世間が許さないんじゃなかったの？
客　今はそんなこと。銃を向けられているのは我々なんですから。
店主　我々にどうしろって気？
女　わかりません。
店主　わからないでそんなもの構えてちゃ駄目でしょ。
女　すみません。今、頭の中がぐしゃぐしゃで。
店主　それはわかるけど。
客　落ち着きましょう。
店主　じゃあ深呼吸。

三人は深呼吸する。

店主　どうですか？
女　駄目です。どうしていいのか。
客　我々を撃っても何の得にもならないってことはわかるよね。
女　はい。
店主　それで彼を撃つつもり？
女　でしょうか？
客　それもいけないことだってのはわかるよね。
女　わかりません。誰かを撃とうとか、そんなことは全然考えてないんです。でも、今、何かにすがってないと潰れちゃいそうで。どうしていいのか。
店主　だったら教えてあげましょう。あなたはその銃を置いて、この店で飲みなおす。
客　そうしましょう。そうして現実の世界に戻って楽しく飲みましょう。ね。
女　現実の世界に・・・
店主　よし、今日は特別に私のおごりって事にしましょう。
客　さすがマスター。
女　そうですね。
客　そうですよ。
女　私は元々、この平凡な現実の世界から抜け出したかったんですよね。そう願っていたからアランにも出会えた。彼なら私を救ってくれるような気がしたんです。だからこれを手放したら、また平凡で孤独な現実に戻ってしまうみたいで。
客　現実の世界も捨てたもんじゃないですよ。
女　役者なんかやってるあなたに、私の死にそうに孤独で退屈だった現実なんかわからない。
客　いいえ、わたしもこれで結構、平凡な現実をね。
女　私に合わせなくっていいです。
客　いや、合わせてる訳じゃないんですよ。役者ったって映画やテレビにバンバン出てるわけじゃないし、舞台

も結局自分たちで自腹切ってやってるようなものだし。茶太郎だって、この辺りだけで流れてるローカルCMだし。そんな小者の役者です。田中さんに「定職に就け」って痛いところ突かれて苦しんで。とっても現実的。「夢持ってていいね」なんて言われることもあるけど、バイトに追われる毎日に、ふと「夢って何だっけ？」なんて思ってしまう今日この頃・・・

女　私は夢もなければ、生きてる実感もなかったんです。だったら死んでるのと一緒でしょ。

店主　生きてる実感なんて平凡でもいくらだってできます。この一杯のお酒だけでも「生きてて良かった」なんてね、そんな些細な実感でもねえ。

客　確かにこんなことすれば、心臓がバクバクいって、逆に生きてる実感わいてきますけど。

女　そうなんです。この心臓の高鳴りが欲しかったんです。アランに出会ってからなんです。彼と話すことの全てが新鮮でした。自分が段々変わって行くのがわかりました。彼なら私に夢を見させてくれる。彼といれば何だってやれるような気がしました。

客　だからって、これはやりすぎですよ。

店主　それに、彼はあなたに夢を見せるために嘘をついてしまった。

女　嘘ではありません。

店主　奥さんいたでしょ。

女　奥さんがいるかどうか、聞かなかったのは私です。だから彼が嘘をついていたわけではありません。私たちの間にはそんなことは関係ないと思ってましたから。少なくとも彼は私のことを愛してくれていましたから。

客　じゃあ、とりあえず、彼のためにもそれ、しまいましょ。

女　そうです。彼のためにもしっかりしなきゃ。

客　そうです。

店主　もう一度深呼吸しましょうか？

女　大丈夫です。

客　よかった。

女は二人にしっかりと銃を向ける。

客　何故？

女　アランのためにここで立てこもらなきゃ。

客　振り出しに戻ってる。

店主　強盗は、彼のためなんですか？

女　強盗は・・・本当は彼が今日する予定だったんです。これも彼がネットで手に入れて改造して。

客　え？どういうこと？

女　でも彼にそんな事させられない。そう思っても、彼を止められなくて・・・気がついたら私、勝手に銃を持ち出して出てきちゃったんです。

客　彼の代わりに強盗を？

女　そうです。

店主　でも、もうその計画は失敗したんです。

女　いえ、まだです。

店主　今のあなたは単に現実逃避してるだけでしょ。

女　そんなことありません。アランとの日々が今の私にとって信じられる現実なんです。だからここで止めてしまう事の方が現実逃避になってしまいます。

店主　ここでこのまま立てこもれば警察に捕まります。あなたが銃を撃って我々に当たれば血が出ます。それが現実なんです。そこにはアランもマリーもいません。

女　私はここにいます。これが私です。アランもいます。あなたたちだって知ってるでしょ。

店主　いいえ。私たちの知っているのはアランではありません。借金を抱え、悩んでいて、奥さんのいる荒川さんです。

女　・・彼がアランです。

店主　アランというのは、あなたと荒川さんが作り上げた幻想なんです。あなたが求めていたアランを彼が演じていただけなんです。

客　モッキーさん、役者でしたからね。
女　演じてなんかいません。
店主　あなたは退屈な日々から一歩踏み出したかった。そのきっかけをくれたのが荒川さんだった。それはそれでいいんです。
客　いいの？
店主　いいんです。多少の現実逃避は。でも問題なのは、強盗の話が出たとき、止められなかったことです。それは既に「ささやかな現実逃避」の域を超えています。あなたも気付いていたはずです。今度のことがどんなに馬鹿げたことか。改造拳銃まで使ったら、後戻りできないくらいに危険だということが。そして、警察に捕まったらあなたたちの現実逃避は終わるんです。もうアランもマリーもありません。今より厳しい現実が待っているだけです。
客　ここで終わりにしましょう。
店主　もうあなたは逃げられません。そうです。私が逃がしません。もうこれ以上同じ事を見過ごすわけにはいかないんです。
客　同じこと？
店主　さあ、銃を。

女は銃を撃つ。銃声。

女　・・・私、本当はわかっていました。お互いを本名で呼び合わない関係がいつまでも続かないって事。でも、仕事がうまくいってない男と人づきあいがうまくできない女。似たもの同士が傷を舐め合うような関係だったとしても、辛い事を忘れて一緒にそうすることの方が私たちには大事だったんです。
でも最近、お互いがアランとマリーを演じているのに気付き始めていました。当たり前です。いつまでも演じ続けることなんてできませんから。
ほころび掛けたこの関係はどこかで壊れていきます。なら、どうせいつか終わるのならアランとマリーのまま終わりたい。だから馬鹿なことだとわかっていても、こんな事をしてしまいました。アランのために強盗未遂をして捕まったマリーとして、このお芝居の幕を閉じようと。
客　彼を止めようと思って、先に強盗に入った。
女　はい。
店主　初めから捕まるつもりで。
女　はい。
店主　それで本当に良かったんですか？
女　彼には夢を見させてもらいました。半年前の私にしてみれば、それだけで充分なんです。
客　駄目ですよ、そんなこと言ってちゃ。まだまだ夢は見られます。そしてその中には本物になる夢もあるはずです。だから、勝手に終わりにしちゃ駄目なんです。
店主　辛い事は誰にだってあります。こういう仕事してるといろんな話を聞く機会が多いんですよ。人間関係がうまくいかないとか、借金で困ってるとか。私たちもお金貸すわけにはいきませんが、お友達になるくらいなら出来ますよ。
女　でも私、こんなことしてしまって。
客　このくらいやっちゃった方が、お互いスッキリと友達になれるかも。
店主　結末はあなたの思い通りにならなかった。強盗は失敗した。けれど、マリーは捕まらなかった。お店は何事もなかったように営業を再開した。

店主は手を差し出す。
女は店主に銃を渡す。

店主　アランとマリーの物語はこれで終わりです。次の物語は新しくあなたが始めてください。
女　私に出来るんでしょうか？
店主　ええ。新しい一歩を踏み出すには充分すぎるほどのきっかけを彼にもらったじゃないですか。

女はうなずく。

客　マスター。さっき言ってた「同じ事を見過ごせない」って？
店主　・・・うんと昔にね、似たような事があったんです。その時は、私は何も出来ずに、彼女はここを出て行きました。
客　海外に行った娘さんのこと？
店主　・・・娘の母親です。もう二十年も前の話です。今もどこかで生きててくれれば、と思うんですけど。
女　何で出て行っちゃったんですか？
店主　平凡で孤独な生活に耐えられなかったんでしょう。本当はあの時、言わなきゃいけない事があったはずなんです。それを・・・。今更ですね。
女　ありがとうございます。
店主　え？
女　ありがとうございます。
客　今更でも、誰かの役には立ったかな。・・・あれ？
店主　どうしました？
客　パトカーの音が聞こえませんか？

三人は耳を澄ます。
戸が開く音。
酒屋が入ってくる。

酒屋　さあ皆さん、私が来たから大丈夫。
客　何だ、田中さんか。
酒屋　あれ？休憩中？
店主　もう終わったんですよ。
酒屋　なんだよ、せっかく急いで配達終えて戻ってきたのに。
客　すみませんね、また今度やりましょう。
酒屋　今度も強盗もの？　でもね、こんなところで芝居やってるより、外の現実の方がよっぽど面白そうだよ。「事実は小説よりも奇なり」ってね。
店主　何かあったんですか？
酒屋　それが、さっきそこで聞いたばかりなんだけど、向こうの方で強盗があったんだって。

店主、客、女は顔を見合わせる。

客　で、どうなりました？
酒屋　それが、犯人まだ捕まってないんだって。逃げてるらしいよ。こっちみたいに銃は持ってないみたいだけど、あんまり外に出ない方が良いって。怖いよね。
女　私行きます。
酒屋　どこに？
店主　彼のところ？
女　はい。
酒屋　彼って？
客　まだモッキーさんかどうかわからないんだよ。
店主　それに、今逃げてるって。
酒屋　逃げてるのは強盗で。まさか、もう新しい芝居始まってる？
女　でも、もし彼だったら
客　なら、私も行きます。
女　わたし一人で行かせてください。
客　でも、モッキーさんは

酒屋　いいじゃないか、ここは彼女に任せておこう。
店主　会ってどうするんですか？また逃げるんですか？
女　・・・もうアランとマリーの物語は終わりました。だから今度はちゃんと荒川さんと会おうと思います。今は彼に会えるかどうかさえわかりませんが。
店主　会えなかったら？
女　私たちはそういう運命だったということです。
酒屋　「運命」、それはあらかじめ決められていることなのかもしれません。しかし、あなたが行動を起こさなければ、その決められた運命にさえ、出会うことは出来ないんです。
客　もし再会したら、二人は再び恋に落ちるんでしょうか？
女　わかりません。
酒屋　そうです。恋に落ちるのに理屈なんか要りません。一目会ったその日から、恋の花咲くこともある。見知らぬあなたと、見知らぬ私が

店主は女に銃を差し出す。

店主　あの、これは？
女　もう私には必要ありません。
店主　そうですね。こんなものに頼らない方が良い。
酒屋　そう。これから君は自分の力だけで困難を乗り越えなければいけないんだ。わかるね。
女　はい。
店主　また、お店に来てもらってもいいんですよ。
女　ありがとうございます。
客　その時は拳銃は勘弁してくださいね。
女　はい。
酒屋　じゃあ、達者でな。

女は一礼して去る。
見送る三人。

客　良かったんですかね、これで。
店主　ええ。もう一度会わなければ、本当の結論は出せないでしょうから。

酒屋は手を打つ。

酒屋　はい、カット。いいね、いいね、いいんじゃない？我ながら。お疲れ、おつかれ。幸子ちゃん呼んでくるね。
店主　いえ、そんな事。
酒屋　だって、外は危ないからさ。

酒屋、外へ出る。

客　田中さん、結局勘違いしたままですよ。
店主　まあ、こんなお店で、こんな事が起きてるなんて、信じられないでしょうからね。
客　これどうします？
店主　やっぱり警察に持って行くべきだよね。
客　何て説明します？
店主　知らない女が置いていった、って。
客　信じるかなあ。
店主　だって、嘘じゃないんだから。

客　我々が疑られたら？
店主　いくら劇団でも、改造拳銃持って無いでしょ。これは強盗が持ってきたの。警察にもそう言って何度も通報もしたんですよ。疑られる筋合いはない。
客　そうだよね。通報したのに来なかった向こうが悪いんだから。でも、これ調べられたら彼女の指紋が

店主はおしぼりで銃を拭きはじめる。

客　それ、共犯にならない？
店主　この銃を持ってきたのは、マリーという女で、この指紋の持ち主ではありませんから。
客　そういう事にしときますか。・・・彼女はちゃんと現実の世界に戻っていくんでしょうか。
店主　さあ。いつもそう思うんですが。ここにいていろんな人の話を聞いて、いろんなドラマがあるんだな、って思っても、そのドラマはみんなお店の外で起きてるんですよね。
客　現実という舞台に出て行く役者を見送っていく。ここは楽屋みたいなところですかね。
店主　うまいこと言うね。

酒屋が戻ってくる。

酒屋　幸子ちゃん、行っちゃったよ。いいの？
店主　仕方ありませんよ。
酒屋　なかなかいい新人入ったじゃない。
客　うちの劇団員じゃないですよ。
酒屋　そうなの？じゃあすぐにスカウトしなきゃ。さっきの演技だって知らない人が来たら本物の強盗と間違えちゃうくらいに・・・あれ？
客　どうしました？
酒屋　こんなところにね、よいしょ。

酒屋は壁に打ち込まれた弾を取り出す。

酒屋　こんなものが埋まってたよ。何か熱持ってるよこれ。あつっ。

酒屋はカウンターに弾を持ってくると、そこにある銃を見つける。

酒屋　・・・まさか、本物？
店主　モデルガンです。
酒屋　何だ。
客　でも、改造してあるんだって。
酒屋　改造拳銃？
店主　はい。だから弾も飛びます。
酒屋　何でそんなものを幸子ちゃんが？
客　だから彼女は幸子でもなければ、劇団員でもないんですよ。
酒屋　え？じゃあ、あの、さっきの、ここに私がいた時に、これが、この・・・
店主　よかったですね。本当に当たらなくって。

酒屋は倒れこみ、気を失う。

客　どうします？
店主　お疲れのようですから、しばらく休んでてもらいましょう。

店主は女のいた席を片付ける。

客　マリーっていう名前はマルガリータから取ったんですかね。
店主　さあ。でも、マルガリータというのはスペイン語なんですよ。英語で言えば「マーガレット」。
客　花の？
店主　そう、花と同じです。
客　あの、菊みたいな、こういう形の。
店主　恋占いに使う花。
客　そうそう、こうやって「好き、嫌い」ってやる。
店主　だからマーガレットの花言葉は「恋を占う」。
客　なるほど。
店主　そして「真実の愛」。
客　さすがマスター、よく知ってるね。
店主　教えてもらったんですよ。うんと昔にね。
客　・・・「真実の愛」か。さて、彼女の愛はどっちと出るんでしょうかね。
店主　さあね。私にはせいぜいこうやって彼女の背中を押してやることしかできません。
客　・・・後は彼女次第か。
店主　出来れば、あなたの背中も押してやりたいんだけどね。
客　何？
店主　いつまで楽屋にいるのかねえ。
客　楽屋？
店主　まあ、いつか来る出番のために・・・
客　マスター。
店主　はい。
客　ひとつ頼んでもいいかな。
店主　どうぞ。
客　マルガリータ。
店主　かしこまりました。

店主はカクテルを作り始める。
音楽。

幕

＊四役の内「女」以外は男女どちらが演じても構いません。またそれに伴う台詞の微調整（恋愛、親子関係に関する箇所など）は可とします。